

怪物の現れ

『フランケンシュタイン』における睡眠と覚醒の境界

工藤紅

はじめに

Frankenstein において主人公 Victor の行動は、怪物創造直後の悪夢、発熱や極度の疲労の中での幻視、北極圏での追跡など、決定的場面において半覚醒的な意識状態のもとで展開される。これらの場面では、現実と非現実、生と死、人間と怪物の区別が揺らいでいるようである。本発表では、「現実と非現実の境界」に注目し、Victor の Dream、Vision、Reality の認識変化を追う中で、Dream や Vision が Reality として経験される過程と、Creature が果たす役割について考察する。

I. Shelley と Victor の Waking Dream

Mary Shelley は子どもの頃から"waking dreams"に耽ることが多く、1816 年のスイス滞在で想像力が刺激されたことにより、*Frankenstein* が生まれる。彼女は、睡眠でも思考でもない中間的状态を Waking dream とし、*Frankenstein* を"a transcript of the grim terrors of my waking dream" (10)と説明している。つまり、本作品は、半覚醒状態の作者から生まれた作品ということになる。実は、Shelley の Waking Dream が *Frankenstein* を生み出す一方で、作中の Victor は Waking dream の中で Creature を認識している。Shelley の Waking dream に浮かび上がった、Victor の原形と考えられる「禁じられた学問に没頭する青白い顔の学生」が悪夢から目覚めて「彼のベッドの傍らに立つ恐ろしいもの」を見た時、"He sleeps; but he is awakened"、つまり眠りが破られた半覚醒状態だったということになる。

一方 Victor は、悪夢の恐怖によって目覚めた時に、“自らが生んだ Monster”と表現する Creature を認識する。この認識は、Shelley にとっての Reality の認識と重なる部分がある。Waking dream から目覚めた彼女が、“the ghastly image of my fancy”を現実世界の"the realities around"で上書きするため、「月光」が差し込む「鑑戸」の向こうのアルプスの風景を感じようとする一方(9)、Victor が目覚めた時に見るのは、「鑑戸」から差し込んだ「月光」の中にいる Creature なのである(49-50)。Shelley にとって怪物は Waking dream の産物であり、それを現実へと置き換えることで、恐怖から逃れようとするが、Victor が目覚めた時に見るのは、空想の産物ではなく、自らが生命を与えた Creature なのである。Shelley の怪物が目覚めとともに Reality と交換可能な存在だったのに対し、Victor にとっては、眠りから覚めてもなお、目の前に Creature は存在し続ける。この差異こそが、Creature を Waking Dream と Reality の境界に位置づける。

II. Victor の Dream と Reality

① 眠り＝忘却、現実＝メランコリー

Victor は、Creature による弟 William の殺害、その罪を着せられた無実の Justine の死を経て、苦しみ、次第に眠れなくなっていく。睡眠は彼にとって「忘却を与えるもの」(98)であり、眠れない Victor は、現実の苦痛を忘れられない状態にある。一方彼は、Reality であるアルプスの大自然から慰めを得、それらは眠りの中でも彼に平穏を与えるが、目覚めた時にはそれらは消え去り、現実に残されるのは「暗い憂鬱」だけとなる。その後 Creature との対話が始まるが、それは、Victor がそのような精神状態にいる時だったのである。

親友 Henry 殺害の容疑をかけられて意識を失ったまま2ヶ月間眠り続け、目覚めた時の彼は、「夢から覚めたように、獄中で目覚め」、その後、何が起きたのか、つまり現実を理解している。ここでの彼の状態は、Dream→Awake→Reality という流れになっており、厳しい現実を受け入れているかのように思われる。しかしその後の「本当に夢を見たのでないのであれば・・・生きながらえているのが残念だ」という言葉からは、その現実を受け入れることができていないことがわかる(182)。

② Creature の存在＝夢のような現実、Creature のいない現実＝忘却

Victor の眠りの意味は、次第に変化していく。Creature から女性の怪物を作るように要求された Victor は、自らが向き合っている行動の恐ろしさから、作りかけたものを引き裂いてしまう。その直後に Creature が現れ、彼の前で復讐を誓うが、その後 Victor は深い眠りに落ちる。目覚めた彼は活力を取り戻し、人間らしい感情を取り戻すが、一方で Creature の"I will be with you on your wedding-night."という言葉は、耳の中で吊鐘のようになり続ける。Creature の脅迫は夢のように現れ、しかし同時に、それは現実の脅威として Victor に迫り続ける、つまり Victor にとって Creature の存在は、夢のような現実となっている(174)。

無罪が証明された Victor の眠りは悪夢につきまといわれるが、目覚めた彼は、敵、つまり Creature がそこにいることを確認し、安心感を得つつも、「抗えない悲惨な未来」が現実にかかることを確信している。Creature のいない現実が forgetfulness となっているのだが、彼の感じている穏やかな forgetfulness は、つかの間の忘却にすぎず、この時の彼にとっては、眠りも現実も、もはや十分な慰めではなくなっているのである(188)。

③ 現実と非現実の逆転

結婚式の夜に Elizabeth を失い、その直後に父も亡くすと、Victor は次第に夢を現実として経験するようになる。夢の中で若い頃、友人たちと過ごした景色を見、目が覚めると地下牢にいたという感覚に陥るが、“O blessed sleep!”と眠りを称賛し、眠りの中でのみ喜びを感じるようになる。夜の夢は彼を慰めるだけではない。彼は、夢を見ることを期待して昼を生きている、つまり、現実が夢によって支えられるという逆転が起きているのである。Victor の眠りは忘却を超えて、現実より夢の方が価値を持つようになっている。「昼の間は夢を見ているのだと思い込み、夢の中で現実を楽しむ」と述べられ、夢の側が現実の役割を担うようになっているのである(207-08)。

この作品の大枠の語り手である Walton は、Victor が「夢の中に出てくる彼の友人たちは、彼が妄想で作り出しているのではなく、あの世から彼を訪ねてきている」と、信じ込んでいると言う(213)。第三者の視点から語られることで、Victor にとって、夢と現実、生者と死者といった、現実と非現実との境界が曖昧になってきていることが浮き彫りになる。

III. Vision という Dream

本作における Dream は、目的や Vision をも意味しており、それもまた現実として経験される。「忘れ去られた錬金術師たちの Dream」を追う Victor の「唯一の目標」は「命を吹き込むこと」であった。その後 Creature の「伴侶」を作ることを受け入れた Victor は、「ほかのあらゆる存在の状態が夢のように過ぎ去り、その考えだけが、人生の現実」と考える。他の現実が夢のように後景へ退く一方で、Vision だけが「人生の現実」として前景化しているのである。

Elizabeth と父を亡くした彼は、「正気」に目覚めると同時に「復讐心」にも目覚めている。全てを失った彼にとって、Creature への復讐が新たな Vision となっている。実際彼は「復讐心がなければ自由を取り戻したことに意味はなかった」と述べており、復讐心こそが彼を生かし、行動させる原理となっているのである(202)。

このように Victor は、「命を吹き込むこと」→「伴侶を作ること」→「Creature を破壊すること」と、次々と新たな Vision を獲得していく。目的を失うたびに別の目的によって生き延びているとも言えるだろう。彼にとっては、Vision という意味での Dream も変化しており、それを人生の現実として経験しているのである。

ここで、Walton に注目する。彼は「北極探検」を dream、vision、enterprise という語で表現する。Victor はそれを madness と表現し、一度はその危険性を説こうとするものの、Vision から目覚めてイギリスへの帰還を決意する Walton に対し、自らが成し遂げられなかった「Creature を破壊する」という“task”、つまり彼の Vision を託そうとする。Walton が Dream/Vision から目覚め、現実的な選択をするのに対し、Victor は自らの Vision を彼に引き継がせようとしている。つまり Victor は、最期まで Vision に囚われ続けているのである。

まとめ

Frankenstein では、現実と非現実の境界が曖昧になっていく。Creature は、Victor が Waking Dream の中で出会う存在であり、同時に Reality の存在でもあることから、現実と非現実の境界に位置する。しかし、作品が進むにつれて問題となるのは、Victor の Reality の認識そのものである。Victor にとって、眠りは忘却を与えるものであったが、Dream、Vision、Reality の関係は変化していき、睡眠中の夢としての Dream を現実として経験するようになる。また彼は、Vision を失うたびに新たな Vision を獲得し続け、それが人生の現実となる。Walton は、最終的に Dream や Vision を放棄し、現実的な選択をする。両者の対比は、Victor が最後まで Vision に囚われ続けた人物であったことを示しているのである。

参考文献

Shelley, Mary. *Frankenstein; or, The Modern Prometheus*. Edited by Maurice Hindle, Penguin, 2003.

Hogle, Jerrold E., ed. *The Cambridge Companion to Gothic Fiction*. Cambridge UP, 2002.

Schor, Esther, ed. *The Cambridge Companion to Mary Shelley*. Cambridge UP, 2003.

Cavaliero, Glen. *The Supernatural and English Fiction: From The Castle of Otranto to Hawksmoor*. Oxford UP, 1995.

Wilt, Judith. *Ghosts of the Gothic: Austen, Eliot, and Lawrence*. Princeton UP, 1980.

武田悠一『フランケンシュタインとは何か—怪物の倫理学』彩流社、2014年。

パンター、デイヴィッド『恐怖の文学—その社会的・心理的考察 1765年から1872年までの英米ゴシック文学の歴史』石月正伸・古宮照雄・鈴木孝・高島真理子・谷岡朗・安田比呂志訳、松柏社、2016年。